



Title	先覚者とその情熱
Author(s)	辻野, 直三郎
Citation	makoto. 1979, 28, p. 2-5
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86116
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

先覚者とその情熱

財団法人大阪防疫協会

理事長 辻 野 直三郎

緒方洪庵と適塾

吾が浪速の地にあって西洋医学の普及につとめ近代日本医学の樹立に大いなる功績のあった人として「緒方洪庵先生、名は章字は公載（一八一〇〜一六三年）文化七年（文久三年）」を挙げなければならぬ。いわゆる幕府または藩主等為政者の保護（官学）を受けず自主的或いは商人の財政的援助を受けて運営した町人の学問「塾」適塾（てきじゅく）が大阪市北浜三丁目にある（国の重要文化財、史跡、大阪大学管理）

緒方洪庵先生は備中、足守の人十七歳にして医学を志し大阪に出て中天遊の門に入った。二十一歳の時さらに江戸に赴き坪井信道、宇田川玄真らについて蘭学を修めた。一八三六（天保七）長崎に行きオランダ商館長ニーマンに従って学び、一八三八（天保九）大阪に帰り開業した。そのかたわら蘭学塾「適塾」（適々斎

塾ともいう）を起し情熱を傾けて多くの人材を育成した。村田藏六（後の大村益次郎）福沢諭吉、長与専齊らを出した。また

左野常民、橋本左内、大鳥圭介、久坂玄瑞、箕作秋坪らもこの塾に学んだ。医学書「病学通論」コレラ対策書「虎狼病治準」ド

イツ医フーエラントの著書の訳「扶氏経験遺訓」など精力的に訳書を公にし西洋医学の普及近代医学の樹立に大いに功績があった。一八六二（文久二）江戸幕府に招かれて「奥医師兼西洋医学所頭取」となった。この

ように緒方洪庵先生によって浪速の地はすでに、近代西洋医学の発祥の礎となり且その系統の人材が続出した。このことは近代医学界のためにも、はたまた国家のためにも喜ぶべきことである。

○阪大微研創、設立の原点
ときは昭和四年初夏、大阪駅一、二等待合室で府立大阪医科大学

長、楠本長三郎博士は谷口腴二教授の熱心な意見に耳を傾けていた。それは大蔵省へ榮転する中島鉄平税関長を見送りに来たのだが少し早すぎて見送る人を待つ間に楠本学長は細菌血清学教室の谷口腴二博士の新奇な提案に興味を覚えたのであった。

その頃、海港検疫所は税関長の業務の中にあつたので谷口教授はコレラやペストの検疫業務顧問として中島税関長とは公のつながりがあつた。この中島は後に大蔵省主計局長になり、政府予算立案の責任者となって大阪帝国大学予算を援助してくれたし、その榮転見送りの日の楠本学長と谷口教授のこの会談が後日、阪大微研誕生の原点ともなつた。（この頃「阪大微研」西川虎次郎氏「谷口腴二」より抜萃）

たのを始め大阪実業界有名人菊地恭三、田代重右衛門、及び菊地の仲介で洋反物商山口玄洞が微研創設費として金二十万円を大阪府に寄附された。なお同人から財団法人の基金として金五万円及び金八万五千元也の事業資金を受けた。このようにして伝染病に関する臨床検査業務とワクチン、血清製造業を主とした。

「大阪府伝染病研究所設置の必要なる理由と」計画の申請書が作成された。かくてこの計画が現実のものとなるに先だち昭和六年五月一日付大阪医科大学は国立に移管され大阪帝国大学医学部となった。

のち昭和九年六月六日国立大阪大学微生物病研究所及び財団法人阪大微生物病研究会も同時設立されこの時点において伝染病予防用ワクチン類の製造と供給が確立したのである。

この世紀の大事業が確立される第一歩は実に谷口腴二博士の炯眼（けいがん）とその情熱が礎石となつたものであると評価すべきである。と共にその周辺に強力な理解者と協力があつたからにはかならない。なおこの六月六日は阪大微研の創立記念日であることは熟知の通りである。

公益法人設立者代表の提出した「阪大微生物病研究会設立趣意書」一、医学の研究上より見たる研究会設立の必要。
現今、本邦に於ける医学の研究は、基礎医学と臨床医学との間に於て、連絡に乏しき恨み多く、是等は組織の欠陥たりというべく、殊に近時分科の進歩発達に伴い、最も重要な総合研究に対し、益々不便を生ずるを見るは、将来に於ける医学研究上深く考慮を要する所なり。

茲に於て、結核病、癌、寄生虫病、その他微生物性各種伝染病等の如き、殊に総合的研究の要なることは已に、先人の着目したる処にして、東京に伝染病研究所を設けられたるが如きも、この意味に外ならず。然るに、当阪神の地たるや、過去の事例に鑑みるも、海外伝染病侵入の門戸にして、その防疫の当否は、実に国家の休戚に関する所なり。然も輸入伝染病研究材料の豊富と、採取の迅速なるは到底東京の比にあらず。依つて大阪に本会を設立し、防疫医学研究の目的を達成

せんとするものにして、本邦医学の研究に、一段の進歩発達を齎すものなりと思料す。

二、予防治療剤製造技術上より見たる必要。

伝染病予防治療に使用するワクチン、血清類は完全なる効果を収めんとすれば、流行型の菌種を用うるを理想とす。即ち防疫の完全を期せんと欲せば、流行地に於て、流行型の菌を以て迅速にワクチンを製造し、之を使用すべきものとして、全国中僅かに東京に一ヶ所の官立伝染病研究機関を有するに止まるが如きは、研究と防疫の実際において不便少なからず。

三、天災地変非常時に際し、国家的施設として必要。

関東大震災における実例を見るも、若し将来之に類すること発生したる場合、現在の東大伝染病研究所の機能停止せんか我國に於ける伝染病研究並びに予防治療剤の製造に、一大支障を来たすべきこと明らかにして恐るべき結果を招来するに至るべし。殊に、天災地変には流行病の附属すること

は古今その撥を一にするものなるを想へば一層憂慮に堪えざるものあり。依つて之が対策の一としても東京以外の地に於て将来伝染病侵入の門戸たる大阪に之が研究並予防治療剤製造機関を設置するは国家的施設として緊急の挙なりと信ず。

昭和九年一月十九日

財団法人阪大微生物研究会

設立者 楠 本 長三郎

文部大臣子爵斎藤実殿

この設立趣意書を拝見して医学の研究上より、また伝染病予防治療剤製造技術上の観点よりして、あますところなく、また地理的観点よりしても将来を洞察した炯眼（けいがん）力のすばらしさ、国民を外来伝染病より救うために刀圭（とうけい）をもつて任ずる憂國の名医が、国家的施設の必要を訴えた国士的風格がにじみ出て、蘊郁（ふくいく）たるものが漂よう誠に堂々たる古今の明文、かつ人々の胸に切々として訴えるものがある。

○大阪大学微生物研究所について
大阪大学微生物研究所は財団法人阪大微生物研究会の母体でもあり、また一面「一卵性双

生児」とも呼ばれる程、密接な相互扶助の關係にある。昭和九年六月六日に国立阪大微生物研究所と財団法人阪大微生物研究会が、創、設立の基本（よりどころ）については相違はあるが同日に呱呱の産声をあげたのであつて唇齒輔車（しんしほしや）の關係にある。大阪府は昭和八年堂島西町にある約（ハコ）坪の敷地に鉄筋コンクリート造り、地下一階地上四階延八五三坪の工事に着手昭和九年に完成し「微生物病に関する学術研究

機関」として同年九月十五日「微生物病研究所」官制が公布された。これを以てしても明瞭なるように、研究所の基礎的研究の臨床応用部門としてその機能はととのい後に臨床研究部門の増設が望まれ昭和十年十二月診療部を設け診療を開始した。之に比し財団法人阪大微生物研究会はワクチン類の製造、供給を目的としたものであり密接不可分の活動によつて伝染病予防と治療の目的が相携えて達成される仕組と解すべきである。

人 法 益 公 十 関 機 立 国

一 卵 性 双 生 児 の 所 以

◎ 国立大阪帝国大学附属微生物研究所創設

昭和九年六月六日

細菌学の基礎的研究

臨床検査業務など

初代所長 楠 本 長三郎

三代所長 谷 口 腴 二

◎ 財団法人（民法第三十四条に依る公益法人）

阪大微生物病研究会設立

昭和九年六月六日

ワクチン類の製造、供給

初代理事長 谷 口 腴 二 博士

これまで東京帝国大学伝染病研究所だけであつたワクチン類の製造機関がこれで東西二ヶ所に整備された。

○ 英国留学時代の研究

谷口腴二博士は留学のため昭和八年四月より十年三月まで英国倫敦ブランドサットン研究所及びグラスゴー大学病理、細菌学教室に於てシー・エッチ・ブラウニング及びロバート・ミューアー両教授の下に於て細菌学及免疫学研究に従事され六月に帰朝された。

ワイル病原スピロヘータを家兎に接種するために、感染モルモット肝臓をすりつぶして家兎に注射した。この家兎の血清が山羊や羊の赤血球を溶血する抗体（抗原は相手の動物に対して異種属のものでなければならぬ。例えばヒツジの赤血球をウサギに注射すれば抗体が出来るがヒツジに注射しても抗体の產生はない。）をもっているのに気づかれたのである。予防接種の起原は人に重い病気を起すおそれのない牛痘の材料を接種して牛痘と免疫学的に特異的關係にある天然痘の感染を防ぐというジェンナーの種痘法が今日の予防接種の起原となつた。その考えはバスターウィルによつてさらに展開され免疫学の発展に組み入れられ、今日の予防接種方法が定着するに至つた。これがフオルスマン抗原とワッセルマン

抗原が類脂体抗原である。このことが谷口博士の滞英時代の大いなる研究の出発点となったわけである。この種の研究はいわば免疫学理論的研究であったが帰国せられてから谷口博士の抗原性そのものを問題にした研究の責任者となられ、後にその重鎮として免疫学の泰斗の域に達せられた。

○谷口博士と観音寺市の奇縁
昭和十九年の頃満州から連れて来た炭坑労働者に端を発して、日本の発疹チフスの流行が始まり二十一年になると全国的なものになっていった。発疹チフスが敗戦病であることは世界史を見れば瞭然のことであって食糧欠乏と不潔が重なりシラミのさばって流行するものである。この昭和二十一年には幸いに発疹チフス対策としてアメリカ製の発疹チフスワクチンとDDTが米軍によって供給されて防疫はうまく行われた。到るところでDDTを服の上から真白にふりかけられた経験は私も今でも覚えている。そのような時に発疹チフスワクチンを鶏卵を用いて製造することが問題になって来た。そんな時たまたま香川県観音寺八幡町でそのワクチンの製造を始めようとしていた渡辺

栄という開業医が阪大微研の谷口博士を訪ねて来阪してきた。この渡辺栄という医師は東京慈恵医科大学の卒業生であって関東軍の防疫給水部隊長北野政次陸軍軍医中將の輩下に属する陸軍技師でリゲッチャの扱いに熟練していてその方面の技術者も幾人かが彼の周辺に集ってもいた。臨床医とも一寸違った一種独特の技術の持ち主であつたし、その夫人の実家の山本家は観音寺の有力者であつた。

(中略) 資産的にも夫人の実家も得たであろうが鶏卵を用いて発疹チフスワクチンの製造を思いたったのである。もっともそれは今日でもそうであるが香川県の観音寺周辺と鹿児島県とは当時も全国養鶏が最も盛んな土地柄で鶏卵の入手供給が比較的容易だという動機もあった。それで一応の見通しと自信がついた段階で渡辺栄は旧知の現神戸大学教授堀田博士が京大助手であつた頃堀田氏を通してその後研究会の理事長にもなった奥野良臣教授を訪ねて来たのだが渡辺栄の話の内容の重大さを知って奥野博士は渡辺を連れて自ら谷口博士の部屋へ案内したのであつた。丁度その頃谷口博士もまた発疹チフスワクチンの

製造を目論んでいるところであつた。それで渡辺の話聞いていたうちに渡辺が実技に於て石橋の研究陣より前進していることを見抜いたし山本家を含んでの資力、用地獲得についての背景が強力であることも、その鋭い触覚で谷口博士は感知した。それで長い渡辺の話聞き終ると谷口博士は「渡辺さん、あなたにお目にかかるのは始めてですが、その発疹チフスワクチンの製造の仕事を僕と一緒にやってみませんか？」というのであつた。谷口博士がその道の最高峰の人であることは渡辺医師も勿論知っていた。実は阪大微研の協力か助言を得るために大阪に出て来たのであるが直接谷口博士を訪れる勇気がなく友人の堀田京大助手を通じたのだ。だが、その谷口博士から協力を提言されたことは渡辺栄にとっては意外なことであつたし嬉しい話でもあつた。「この項新医薬芳名録、阪大微研」西川虎次郎より抜萃による。

る。かくて観音寺研究所はその後発展の途をたどり病原微生物病予防と治療機関としての設立目的に向つて日夜その使命達成に精進が行なわれていることは誠に心強いことであり斯道興隆のため誠に慶賀にたえないところである。

むすび
古くて新しい言葉として日本人家庭に今なお、脈々として、いぶき続ける「内助の功」を捧げられた立子夫人にあらためてここに深甚の敬意を表すると共に生前谷口博士ご愛誦の「学問には国境はないが学者には祖国がある」このお言葉を谷口博士二先生のご霊前に呈して拙稿をむすぶ。暴言多射御叱正を。

財団法人阪大微生物病研究会の組織(概略)



イ 発疹チフスワクチンの製造道程は観音寺市在住の東京慈恵医大卒業元陸軍技師医師渡辺栄の協力申出等谷口博士との肝膈相照らすところより急速に製造発展となる。

これは昭和十九年頃旧満州国より入国した炭坑労働者より端を発し昭和二十一年全国的蔓延、この時において阪大微研は開発準備に着手した。

ロ 凡そ微生物に関する広汎な分野に予防と治療を目標としワクチン類を研究開発製造して公益事業に貢献している。

生物学製剤 各種ワクチン
日本脳炎ワクチン、インフルエンザワクチン、乾燥弱毒性麻疹ワクチン、乾燥弱毒性風しんワクチン、百日咳、ジフテリア、破傷風混合ワクチン、コレラワクチン、沈降ジフテリア破傷風混合トキゾイド、その他

略 歴 (一部)

正三位勲二等

医学博士 谷口 腴二

明治二十二年二月十五日生

第六(岡山)高等学校卒業 東京帝国大学医科大學卒業

伝染病研究所講習修了

年 月 日

大正五、九、十八

任防疫官 内閣

大正五、十二、二十六

伝染病研究所治療研究業務ヲ囑託ス 東京帝国大学

大正八、四

英国倫敦ブランドサットン研究所及グラ
スゴー大学

病理細菌学教室ニ於テ シー・エツチ・
ブラウニング及ロバート・ミューアー両
教授ノ下ニ於テ細菌学免疫学研究

婦 朝

任伝染病研究所技師 内閣

医学博士ノ学位ヲ授ク(論文提出東京帝
国大学)

公立大学教授ニ任ス高等官四等 内閣

大阪医科大学教授 文部省

細菌血清学科長ヲ命ス 大阪医科大学

細菌血清学担任ヲ命ス 大蔵省

神戸税関検疫医務ヲ囑託ス 大蔵省

大阪税関検疫医務ヲ囑託ス 大蔵省

鼠咬症病原研究ニ対シ大阪毎日
新聞社寄附東宮御成婚記念 帝国学士院
賞受領

任大阪帝国大学教授高等官三等 内閣

細菌学講座担任ヲ命ス 文部省

防疫委員ヲ囑託ス 大阪帝国大学
医学部附属医院

阪大微生物病研究会理事長

細菌血清学部長兼防疫学部長ヲ命ス

昭和九、十一、一

昭和七、六、二〇

昭和七、七、七

昭和六、五、一

昭和五、五、十五

昭和四、五、二九

昭和三、七、二四

昭和二、九、十九

大正十一、七、六

大正十一、十、六

微生物病研究所

支那へ出張を命ス 外務省

臨時対支防疫事業部事務囑託ス

財団法人同仁会

補微生物病研究所長 文部省

生物学的製剤等基準調査 厚生省

委員会専門委員を命ずる

細菌血清学部長を命ずる

防疫学部長、化学療法研究部長
を兼ねて命ずる

微生物病研究所

第二回日本学術会議会員

選挙に当選する

日本学術会議

選挙管理会

中央選挙管理会

委員長

大阪大学医学部長に補する 文部省

大阪大学微生物病研究所長事務 文部省

取扱を命ずる

昭和二六、四、三〇

昭和二七、四、一

昭和二八、四、一

昭和二九、四、一

昭和三二、四、九

昭和三六、二、十二

昭和三八、二、十二

昭和三六、二、十二

昭和三六、二、十二

昭和三六、二、十二

昭和三六、二、十二

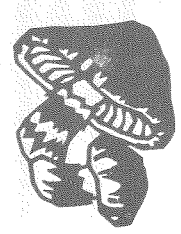
昭和三六、二、十二

昭和三六、二、十二

昭和三六、二、十二

昭和三六、二、十二

昭和三六、二、十二



府 政 だ よ り

大阪府衛生部では次の主な行事が行われる予定です。

- 薬と健康の週間 10月17日～23日
- 目の愛護週間 10月10日～16日
- 麻薬覚せい剤禍撲滅運動 10月～11月
- 狂犬病予防月間 10月中
- 寄生虫病予防旬間 11月21日～30日
- 精神衛生普及月間 11月中
- 献血推進月間 12月中
- 食品等年末一斉取締 期間 年末